

# 春さんと私

島津 勝

「春さん！散歩に行くか・・・」

「散歩・・・何だね、分かんないよ！」

春さんは、私の顔を睨み付けるようにして見ていたが、やがて私の差し出す手の意味が分かったのかにっこりとして立ち上がった。

始めて見る彼女の笑顔だった。

私は玄関の鍵を開け外に出た。

「待ってよ！お父さん、」彼女は甘えるように言った。その豹変振りに私は驚いた。

「お父さんか、まあ何でもいいわ、さあ行こう」春さんは私の手にすがるようにして掴まった。冷たい氷のよ  
うな手の感触だった。

「何だ、手が冷たいね、寒いの、」

「えっ、手が、わかんないようお兄さん」



彼女は私を見つめ嬉しそうに腕を絡めてきた。

「お兄さんか、」私は苦笑しながら彼女のなすがままにした。

認知症が重くみんなの仲間に入れないからどうしても孤独だ。彼女は徘徊の癖がある。うっかり目を離すといつの間にかいなくなってしまう。だから出入り口はすべて鍵をかけてある。春さんは玄関に行くとき鍵のかかった戸を何度も叩くが開けることは出来ない。やがて諦め椅子に座って下駄箱の履物で遊ぶ。

二ヶ月前にオープンしたデイサービス、私は送迎と昼食の仕度、それにレクレーションの手伝いでも出来れば良いという気持ちで就職した。しかしいざふたを開けてみれば管理者という重責ではないか、私は不安だった。短期の講習を受けヘルパーの資格は取ったものの実際の経験はない。他のスタッフは皆経験者だ。この仕事に限って上司だからと言って何も知らなければ口出しは出来ない。

その心配は直ぐにやってきた。ヘルパーに相談されても答えることが出来ない私に、彼女たちの見る眼が当然のように違ってきた。明らかに見下している。顔を合わせても挨拶をしない、朝から気が重くなる。ならば自分のほうから「おはよう」とでも言えば良いではないか、私は自問自答しながら自らを叱責した。しかし彼女らの利用者に対する出迎えの挨拶が良いだけに、それがまた逆に自分対する態度と比較してしまうのだった。

専従は私と生活指導員の女性と二人だけ、後のヘルパーは皆パートで私の娘ほどの女性である。生活指導員は事務も担当で介護の経験もあり、しかも夫が経営者となるはずだったからすべてを掌握している。素人の私が口を挟む余地もなく完全に采配を振るっている。私は干渉せず彼女のなすがままにした。若いが行動力もあり統率力もある。同じ世代のヘルパーも彼女の言うとおりに動いている。いつしか彼女は有頂天になっていた。たまに顔を出す経営者までも見下している。それに彼女の態度は利用者に反感を招く恐れもあった。利用者はあくまでもお客様、まして人生経験の豊かな先輩ばかりだ。親しくなったからといって、名前をちゃん付けで呼んだり、相手の口車に乗ってまともにも言い返す、テンションの高い彼女の言動は側において気になった。管理者としてこのままで良いのだろうか、私は疑問を抱きながらも、何も言えない自分に腹が立った。

私は専ら雑用と食事の仕度に専念した。

食事が終わると休む暇も無く片付け、一時になると午後の体操が始まるのだ。

春さんは相変わらず仲間に入れず玄関でスリッパを重ね合わせている。

なぜ彼女を誘ってやらないのだろう。という疑問が私には以前からあった。そう春さんを散歩に連れて行ってやろう。春さんの介護に手を焼いているヘルパー達も、彼女の所在が分れば安心するだろう。私は迷うことなく春さんに手を差しのべた。否もかしたら私が彼女に救いを求めたのかもしれない。

緩やかな勾配で坂道が続く。日当りも良く風もない穏やかな日である。

「ほら春さん、きれいな水が流れているよ」

「何だねそれが、そんなのはほっとけばいいんだよ」会話は全て一方通行であった。

道の脇に巾五十センチくらいの水路があり、きれいな水が勢いよく流れている。上流には山葵田もあるというから水が豊富だ。昔は生活用水に使っていたようである。この周辺には七戸の民家が点在している。一番高台にでんと構えている家は何百年も経っているという歴史ある建物、茅葺で県の指定文化財に指定されている。古いといえば、私が勤めるデイサービスもやはり古民家を改造したもので、家主の話では三百年以上は経っていると言っていた。

部屋の真ん中には幅一尺以上もある大黒柱があり、天井は太い梁が組み合わせてある。何百年の時代を経て未だびくともしない建物、たいした道具のない時代にどうやって建てたのだろうか、山の反対側は山梨県だから静岡より寧ろ山梨との交流が深かったのだろう、きっと武田の落ち武者が住み着いたのだ。とにかく歴史のある興味の尽きない山村である。

「散歩かね」私たちの顔を見て人のよさそうな老女が声を掛けてくれる。私が立ち止まって老女と話すと、春さんの態度が急変する。「いいからどんどん行きな、あれは何だね、馬鹿みたいに」と訳の判らない事を口走って私の腕を引っ張る。やきもちを焼いているのだ。ほんのちょっと前、あの穏やかな顔で私を見つめ「お



父さん」と言った面影はいない。顔が完全に引きつっている。私は老女に「すみません」と頭を下げその場を離れた。こんな山奥なのに日当りは良く、どの家も屋敷が広く庭にはきれいな花が咲き乱れている。周りには段々畑があり何種類もの野菜が揺れ動いている。そして茶畑もある。皆人が恋しいのだろうか、話し好きで親切な人たちばかりだ。坂道だから凡そ三十メートルも歩かないうちに春さんは立ち止まった。そして私に持たれかかり「お父さん、かんだるいよ、」と言った。あまり歩いたことはないのだろう。

「何だ、もう疲れたのか、それじゃあそこで休もう」私は辺りを見回して日陰を探した。道の脇に香花の木が二本ある。その横に藍黒い苔の付いた石が無造作に並べられている。真ん中に二対のお地藏さん祀られているが、顔の形も分らず彫ってある字も分らないかなり古いものだ。しかし水差しには真新しい花が飾られている。もしかしたら水路の守り神なのかもしれない。

「春さん、ここへ座ろう」私は先に座り彼女に隣へ座るように促がした。すると彼女はその地藏さんに手を合わせた。私は感心して彼女の真似をして拝んだ。そういえば送迎の途中、彼女はお地藏さんや社があると必ず手を合わせる習慣がある。不思議に思って春さんに聞いてみたが、春さんの返事はなかった。きつと何か強烈な思い出があるのだろうか。

風もなく穏やかな日である。安部川の向こう岸の山の中腹から真下に流れ落ちる滝が見える。確か朝日滝といていた。

「ほら、春さん滝が見えるよ、」と私は滝の方を指差した。春さんにはっこりして私の方を見た。そして「そうだね、」と言ったが何もわかってはいないようだ。多分私に合わせてくれたのだろう。

私はお茶の葉っぱを摘み口に当て草笛を吹いた。ふるさと、赤とんぼ、夕やけ小やけ、春さんは草笛を吹く私の顔をじっと見ていたが、そのうち頭を上下に、体を左右に振りながらリズムに合わせて口ずさみ始めた。

記憶が戻ったのでは、と私は一瞬思った。私は嬉しくなった。これほど穏やかな優しい春さんの顔を今まで見たことはない。

「先生凄い、上手、」春さんは手を叩いた。

「あれ、今度は先生か、じゃ何か春さんの知っている歌、」それには答えない。春さんは私にもたれかかっている。私を恋人と思っているのだろう。私はそのまま草笛を吹き続けた。彼女が正常なら出来ることではないだろうが、また私だってできるわけがない。さっき出会った老女が背負い籠を担いで来た。

「いい音だね、大変だね」と私に同情するかのように行った。春さんの表情が急変した。老女を指差して大声で叫んだ。

「何だね、あれは馬鹿みたいに、あんな物を持って、ほっておけばいいんだよ」完全なるやきもちである。私はまた老女に謝った。

「春さんそろそろ帰ろう」私はご機嫌を取りながら優しく言ったが帰る気はない。

「春さん、もうおやつだぞ、おやつを食べに行こう」彼女はしばらく考えていたが、やがて「おやつ・・うん」と素直に頷きました私の腕にしがみつき寄り添って歩き出した。困った時は食べ物で釣るといふ奥の手がある。食べる事しか楽しみのない春さん。「美味しい、有難う、嬉しい、おとうさん」と言ってお腹を膨らませるから私も作る張りあいがある。

そんな訳で春さんと私との間には誰にも入れない信頼関係が芽生えた。

今では春さんに困ったとき、春さんに手の焼いたときは私の出番となる。

今まで見下したような顔で見えていたヘルパー達の私を見る目が多少違って来た。

「春さんはあの人に任せておけば大丈夫」という安心感、意外なことで若いヘルパーたちから認められたようになった。しかし歳の差はどうしても考えの隔たりがある。

ある日スタッフのミーティングをやるからということで呼び出された。

それは私に対する注文だった。私を見下す冷やかな五人の眼、彼女たちの言い分を聞けば納得のいかないことばかりだった。これが今の若い女性の姿なのだろうか、いや自分の娘はこんなことはない。



「お父さん怒っちゃ駄目だよ、」行き渡る私に妻が言った言葉だ。

私は彼女たちの言い分をうわの空で聞きながら頭の中では「勘忍、勘忍、勘忍は無地長久の基、」と古人の教訓を唱えながら彼女たちの言い分を聞き流していた。